

# 2023 年度 瀬戸内風景制作プロジェクトレポート

## 「海路に栄えた広島風景を描く」

### 【 担当教員 】

学部・学科・専攻	職 名	氏 名
代表者：芸術学部美術学科日本画専攻	講師	山浦 めぐみ
芸術学部美術学科日本画専攻	教授	今村 雅弘、前田 力
芸術学部美術学科日本画専攻	准教授/助教	荒木 亨子 / 大庭 孝文

### 【 プロジェクトの概要 】

広島市立大学地域展開型芸術プロジェクトの取り組みとして、2022年度から継続して日本画研究領域が大学院生を対象に実施したプロジェクト。現在の広島・瀬戸内の風景を「海路に栄えた歴史文化」という大きな繋がりの中で俯瞰し、絵画的な視点とアプローチからその原風景を捉え直すことで、地域の魅力を再認識する新たな機会を創出し、芸術の社会的有効性を発信することを目的とした。また同時に、日本画領域では試みの少ないサイト・スペシフィックアートの観点からの創作プロセスを体験する応用研究の機会として、各参加者の創作表現により深い洞察と展開をもたらすことを期待する実験的な取り組みでもあった。

今年度研究対象とした「呉」（現在の呉市）は、内湾の多島に面した特有の地形から、古くは遣唐船の寄港地としてアジアと日本を繋ぎ、中世以降は廻船航路の主要港として物流や情報の通り道となり、明治以降は帝国海軍の拠点となるなど、各時代の経済活動ないし国家形成における重要なハブとしての都市機能を発展させた地域性を有しており、本プロジェクトでは、事前の調査研究およびプレゼンテーション授業を通じてこうした歴史の体系的な知識を参加者全体で共有したのち、7月から12月までの数回に分けて実際に呉市内を散策し、作品制作を行なった。

各作家は、事前に得た知識を手がかりとしながらスケッチなどを開始し、現場で実際に目にする風景や身体的な感覚体験をそれぞれの視点で創作に落とし込むとともに、そうして得た印象をより直感的な表現に置き換えていく目的から、普段扱う日本画等の専門材料にこだわらず、各々の制作意図に即した材料や表現方法（ミクストメディア）によって作品を完成させた。

本プロジェクトの成果発表の場として、12月にギャラリーG（広島市中区）、1・2月にかけて入舟山記念館（呉市）にてそれぞれ作品展を開催。研究記録として図録を作成、展覧会場および学内関係者に無料配布した。

## 【プロジェクトでの成果等】

### 《 イントロダクション・事前研究 》

先述の通り、本プロジェクトでは3～4名ずつの班に分かれて研究対象地域の事前リサーチを行い、基本的な歴史文化の特徴についての知識を共有するところからスタートした。呉市および関連機関が提供する文献や情報を元にまとめられた各班のプレゼンテーションを繋ぎ合わせることで、私たちが普段イメージする「海軍の町・呉」の背景にある瀬戸内特有の地域性や文化性を体系的に理解し、今日の様相として目に映る現地の風景をより深く洞察する様々なきっかけを得ることが出来た。

今年度は特に、メディア造形や彫刻など、日本画領域以外の大学院生の参加があったことで、前年度に増して多様なメディアを意識した新たな視点からのプレゼンテーションが見られ、創作の前段階として有意義な情報共有が出来ていた。



プレゼンテーション授業風景（2023年5月30日／芸術学部棟424）

### 《 現地取材・スケッチ・制作 》

事前研究ののちに現地を訪れた参加者は、序盤に呉の歴史的建造物及び資料館である入船山記念館、海軍時代の記録資料を展示する大和ミュージアムを視察。各施設で専門家の解説を伺い、先に得た基礎知識と繋ぎ合わせながら、現地ならではの実感に伴う知見を得ることができた。



機関の視察風景（大和ミュージアム展示室/呉市）

その後は現地にて自由行動とし、各々専門のマテリアルや表現方法を軸にどのような作品制作を行うかについて、サイト・スペシフィックなコンテクストを含めた思索を繰り返した。日本画領域の学生については、普段の制作プロセスとして行なう「スケッチ」を元に展開させるケースが多く見られたが、その中でも、日本画制作の特徴の一つである『層を重ねる（＝二次元の画面に絵具の層を塗り重ねる、平面の素材を重ねていく）』という作業に、「歴史／時間の蓄積」や「風景イメージの重なり」を結びつけて作品化する試みや、『線を引く』という作業を造形の軸に作品アイデアを展開するなどの多彩な試みが成された。

このほか、メディア造形の学生を中心に、作家が現地で受けた感覚的な印象を、映画や演劇のワンシーンのような切り取り方、表現方法を視覚化していくものや、「鉄」や「堅牢な構造的性」という現地特有の素材をコンテクストとして制作を行なった彫刻学生の作品など、前年度と比較してより幅広いベクトルの創作アプローチが見られたことが今回の成果として挙げられる。

## 《 成果発表展・展覧会図録作成 》

### 『広島海景 -2023 年度日本画専攻地域展開型芸術プロジェクト- 』

会期：2023 年 12 月 12 日～17 日

会場：ギャラリーG（広島市中区上八丁堀 4-1 公開空地内）

出品者作家：吉村織那、松川華子、村上明花里、吉川由夏、宇都宮朱里、蔡茹夢、田中久美子、鶴岡真由、羽毛田和季、松本花果、佐野翠、ヤマノイユナ

前回に続き 2 度目となるギャラリーG での成果報告展を開催。昨年度のプロジェクト終了後に参加者を対象として実施したアンケート結果を踏まえ、展覧会の展示構成を全て参加者らが計画することとし、お互いの作品をどのように配置するか、空間構成を全員でコンセンサスを取りながら作り上げる試みを実践した。平面作品が多く、それらを壁面にレイアウトするという概念がベースにあることから、結果的には昨年と比較してそれほど差異のある空間構成には至らなかった印象だが、個々の作品がギャラリーの高い壁面を伝い、波打つように、不規則な間合いを取りながら配置されていたことから、全体を通じて現地特有の瀬戸内の空気感や日差し、音のようなものが感じられる展覧会となった。



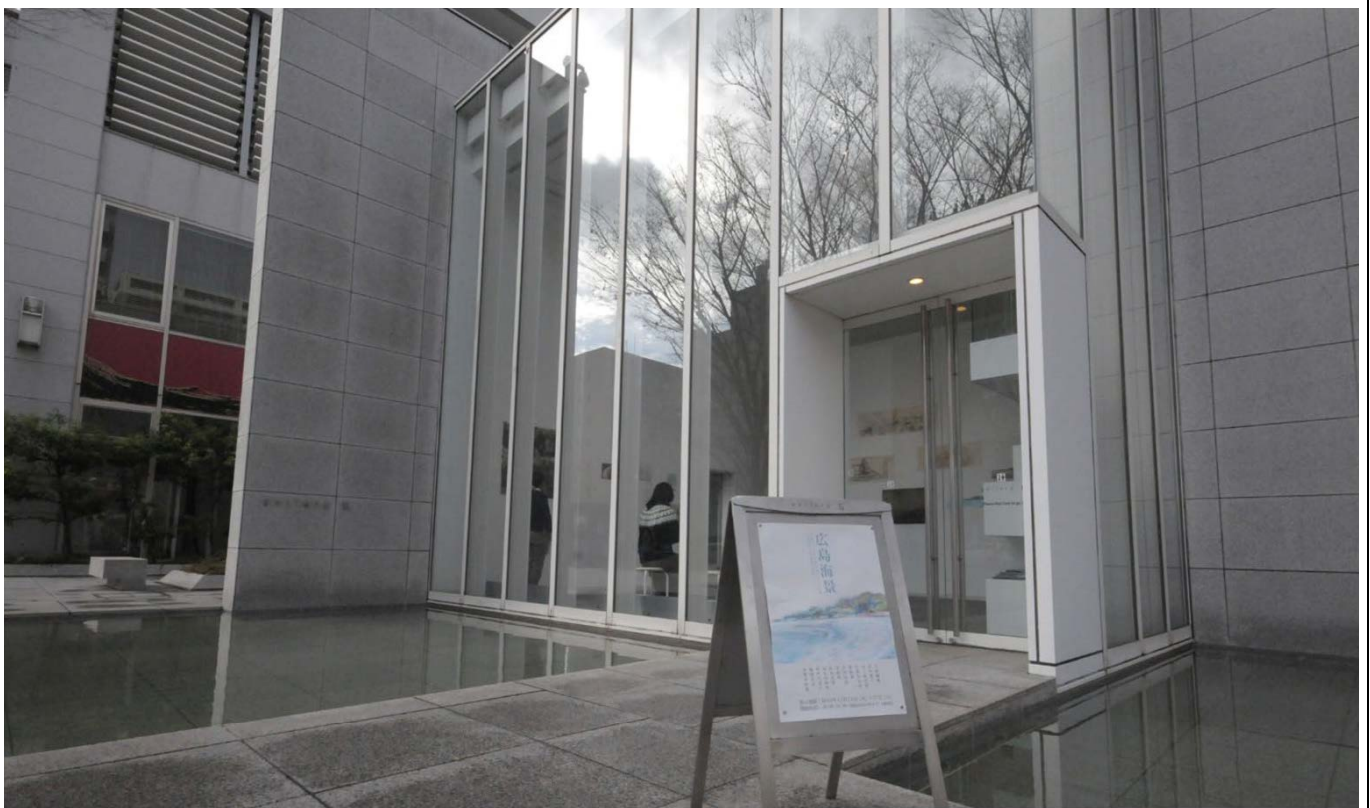
『広島海景 -2023 年度日本画専攻地域展開型芸術プロジェクト- 』展示風景 1

(ギャラリーG 展示室内)



『広島海景 - 2023 年度日本画専攻地域展開型芸術プロジェクト-』展示風景 2

(ギャラリーG 展示室内)



ギャラリーG 展示会場外観

『広島海景 - 2023 年度日本画専攻地域展開型芸術プロジェクト-』

また、昨年度に続き、展覧会図録を作成、各ページに作家ごとの作品画像と制作ノート（テキスト）を掲載した。それぞれの作品制作を通じて発露された作者の言葉は、彼らが何度も訪れ、滞在し、見つめた場所で感じていた内在的な感情や創作の背景を生々しい温度とともに伝える貴重な記録であり、展覧会を訪れた鑑賞者はもちろん、作者本人が自身の制作を客観的に理解するための有効な手がかりとなっただろう。

### 『呉にて』

会期：2024年1月31日～2月4日

会場：入船山記念館・旧呉鎮守府司令長官官舎（呉市幸町4-6）

出品者作家：吉川由夏、宇都宮朱里、蔡茹夢、田中久美子、佐野翠

7月に現地視察を行なった入船山記念館のご協力により、旧呉鎮守府司令長官官舎にて有志による関連企画展を開催する運びとなった。地域振興ならびに歴史的建造物活用の観点から、本プロジェクトとの連携イベントを開催してはどうかとの先方からの提案もあつての実現であり、地域連携を軸とした今後のプロジェクト展開が期待される展覧会開催となった。呉市をテーマに実施した今回のプロジェクトのサイト・スペシフィックな作品性とコンセプトを、より完成度の高い形で終結させることができただけでなく、ギャラリーGの展示とは異なる作品の新たな見え方を発見するなど、出品作家にとって学びの多い発表展となった。全国からの観光客や地域の小中学校等の見学訪問が多い本会場で展覧会を開催できたことは、本学プロジェクトの取り組みを地域社会に還元する目的においても効果的であったと捉えられる。



『呉にて』展示風景（入船山記念館・旧呉鎮守府司令長官官舎内）

## 【 全体を終えて 】

2年目の研究を終え、今年度は他専攻学生の積極的な参加や、プロジェクト経験2年目の日本画学生が在籍したことで、参加者全体の創作的視点と実践の幅が広がり、こうした取り組みの今後の可能性を見出すことができた。2024年度は予算減額等により継続を一旦断念したが、後継となるプロジェクトを近年度中に改めて立ち上げることを検討している。

日本画領域が地域ないし社会に対してどのような還元活動を実践していけるか、またそれが、長期的な視点に立ちどのような作家育成の一助となり得るかについて、この2年間の実績から検証し、次の研究にフィードバックしたい。